

# 深イ〜話!

No.10

〜〜〜文学博士鈴木秀子先生のお話です。〜〜〜

先生が小学校5年生の担任になりました。

クラスの生徒の中に、勉強ができなくて、服装もだらしない不潔な生徒がいました。その生徒の通知表にはいつも悪いことを記入していました。

あるとき、この生徒が1年生だった頃の記録を見る機会がありました。そこには、「明るくて、友達好き、人にも親切。勉強も良くできる」と書いてありました。間違っていると思った先生は、気になって2年生以降の記録も調べてみました。

2年生の記録には、

「母が病気になったため世話をしなければならず、ときどき遅刻する」

3年生の記録には、

「母親が死亡、毎日悲しんでいる」

4年生の記録には、

「父親が悲しみのあまり、アルコール依存症になってしまった。暴力をふるわれているかもしれないので、注意が必要」と書かれていました。

先生は急にこの生徒が愛おしく感じました。悩みながら一生懸命に生きている姿が浮かびました。放課後、先生はこの生徒に、「先生は夕方まで教室で仕事をするから、いっしょに勉強しない？」と男の子に声をかけました。男の子は微笑んで、その日からいっしょに勉強することになりました。6年生になって男の子は先生のクラスではなくなりましたが、卒業式の際に先生は男の子から、「先生はぼくのお母さんのような人です。ありがとうございました。」と書いたカードを受け取りました。

卒業した後も、数年毎に男の子から手紙をもらいました。

「先生のおかげで大学の医学部に受かって、奨学金をもらって勉強しています。」  
「医者になれたので、患者さんの悲しみを癒せるようにがんばります。」  
などと手紙に書かれていました。

そして、先日届いた手紙は結婚式の招待状でした。そこには、「母の席に座ってください」と書き添えられていました。

人は本当に辛いとき、たった一人でも支えてくれる人がそばにいたら、がんばれるのだと思います。